

亜細亜大学

国際関係紀要

第34巻 第2号

研究ノート

日比関係における英語への眼差し

——日本側からみる「フィリピンの英語」.....小張 順弘 (1)

【研究ノート】

日比関係における英語への眼差し ——日本側からみる「フィリピンの英語」

小張 順弘

1. はじめに

「国際化」「グローバル化」という表現を様々な分野で触れる機会が増えつつある現在、私たちの生活の中で変化を感じることも多くなっている。この変化に伴い、日本社会においても「多様性（ダイバーシティ）」の重要性が指摘され、「多文化共生」や「SDGs」が掲げる具体的な目標も浸透してきており、持続可能な開発の国連のアジェンダ 2030（「だれ一人取り残さない」「もっとも取り残された人には最初に手を差し出す」の理念）にもとづく社会の実現に取り組んでいる。

日本を取り巻くアジア諸国との関係については様々な認識が提示されているが、日本が経済面で主導的役割を果たしていた段階から、競合する段階へと急速に変化しており、文化面においても「支えあい反発しあいながら毛細血管までもつながったような深い相互依存関係に入りつつある」（野村, 1996, p.286）状況があり、この結びつきを促す役割を担っている「ことば」の一つが「英語」である。「アジア」「日本」「英語」というキーワードに着目してみると、「アジアの英語」に様々な眼差しが向けられていること見えてくる。

例えば、太平洋戦争期、明治から昭和にかけて活動（映画）弁士として活

躍した徳川（1977）は、シンガポールを訪問時に現地で娯楽映画を鑑賞した際に三等客が英語の台詞でゲラゲラ笑っている状況に触れ、「私にはこの英語分からず、どうも彼らの方が文化人みたいな気がした」（p.189）と日記に書き残している。また、最近では、バンコクの路上でぼったくり被害に遭遇する日本人大学生たちについて、日本よりも遅れた国の男に英語で話しかけられ、大学生という自尊心（英語くらいできる）が絡んだ「英語コンプレックス」の存在について、日本の大学生は「人を見抜く力が、英語というフィルターがかかると萎えてしまう」（下川, 1994, p.248）ため、被害が繰り返されるのではないかと記されている。さらに、下川（2007）はバンコクで一時期よく出会った日本人グループを「留学リベンジ組」（学生時代に英語圏への留学経験を持つが、アジアに活路を求めてやってくる日本人）と呼び、この背景には学生時代の1~2年の留学経験でも、アジアなら留学で学んだある程度の英語力があればエリートとして再起を図れるのではないかととの優越感にくすぐられた思惑があるのではないかと描いている。

時代背景や場所は異なるが、これらは英語を手掛かりとした「気づき」の断片的描写であり、「アジア、日本、英語」が交差して立ち上がる日常への「眼差し」といえる。「アジア」と「日本」の關係に「英語」という補助線を書き入れることで、背景にある諸要因が絡み合う關係が浮かびあがり、その關係性を適切に把握する機会になる。

この英語に対する「眼差し」を日本社会に向けてみると、「アジアの英語（Asian Englishes）」や「世界諸英語（World Englishes）」に関する一般的な認識や言語的多様性への意識の高まりがある一方、現在では「フィリピンの英語」が日本の英語教育制度に巧みに組み入れられ、その教育的役割が顕在化している。

これは「オンライン英会話市場の拡大傾向（主にフィリピン人講師）」「フィリピン英語留学者数の増加傾向」「フィリピン人ALT（Assistant Language Teacher, フィリピン人外国語指導助手）の増加傾向」からも明らかである。日本の英語学習者はどこかの学習段階で何らかの形で「フィリピ

ン」と出会う機会が増えつつある状況があり、日本語でもフィリピン語でもなく、英語が両国をつなぐ関係が結ばれている。

筆者は社会言語学や応用言語学を専門とし、フィリピンを中心とした多言語状況を主な調査対象地域としてきた。現在では、国際関係学部の教育に位置づけられる社会言語学関連科目や海外フィールドワーク科目などを担当しており、「国際関係における言語」の機能・役割への関心を持っていることから、「アジア（調査地であるフィリピン）」、そして「日本（向き合う多くの学生たち）」をつなぐ「言語（主に英語）」の関係についても、強い関心を抱いている。私たちを取り巻く状況の背景には多国間関係や二国間関係が複雑に絡み合い、結果として雑多な現実が眼前に現れてくるが、この本質を探るための基本作法として「世界の相互依存がこれまでに深くなった今日、地域の多様性を強調するのではなく、その多様な地域の中にどのような関係が埋め込まれているのか、そして地域を超えてどのような関係が広がっているのかを理解するべきである」（山影, 1994, p.206）という立場で、英語がつなぐ日本とフィリピンの関係性を探ってみたいと考えている。

「フィリピン英語留学」「オンライン英会話」「ALT 講師」などに関して英語学習や異文化理解をテーマにした研究成果や教育現場での実践報告も増え、英語教育への有意義な指摘や提言も多くあるが、日比両国のつながりの実態把握には断片的であり十分であるとは言えない。そのため、この取り組みを、変化する日比関係で顕在化しつつある「日本の英語教育とフィリピン」の関係を探る研究課題の一部として位置づけ、時代や立場により異なる「フィリピンの英語」への「眼差し」に着目し、その「眼差し」に含まれる評価（評価基準・尺度）や価値判断（優劣や自己解釈）について整理を行いたい。

この試みについて、以下2点の補足説明を記しておきたい。1点目は、「眼差し」という語彙には多くの哲学的議論があり、分野により特定の意味・役割を前提としているが、ここでは「さまざまな変動のきざしをかきわけ、うねりゆくすえが、どういった方向へとむかおうとするのか、想像しよう」と

し続けること」(ましこ, 2012, p.21) という「社会学的まなざし」と、ことばの多様さ、ことばの変化、話者/選択する話者、多言語社会を対象とする「社会言語学的まなざし」(佐野, 2015) の両方を意識して「眼差し」という表記を使用したい。また、「眼差し」の構図には「主体(見る側)―客体(見られる側)」が含まれるが、この関係のあり方を探り、その本質(意味)を理解するためには日本からフィリピンへの一方的な眼差しのみならず、フィリピン側から見る「フィリピンの英語」や「日本」へ向けられる眼差しも考察しなくてはならないとの認識を持っていることも付記しておく。

2点目は、筆者の別稿(小張, 2021)では、言語学的研究における国別英語変種の「フィリピン英語(Philippine English = PE)」と国際的ビジネス環境で商品化/コモディティ化傾向のあるPEを基礎とする「フィリピンの英語」(Commodified Philippine English = CPE)」として使用したが、これらの語彙を文脈により区別して使用する必要がある場合には記載し、その他の場合には資料記載の原文表記を用いることとする。

2. 研究ノート構成

(1) 目的

この研究ノートでは、幅広い範囲の異なる立場の日本人々から注がれる「フィリピンの英語」への「眼差し」に含まれる評価や価値判断についての変化の特徴の整理を行うことを目的とする。また、日本側の眼差しの変化を手掛かりにすることで、日本とフィリピンの「ことば(英語)」を介した両国の関係性の変化を読み取る試みとしたい。

この目的のため、日本側から向けられる「フィリピンの英語」に対する眼差しの描写をもとに、以下の個別の問いを中心に日本との関係性についての概要の整理を試みる。

- ① 日本側からみた「フィリピンの英語」に対する眼差しはどのようなものか。

- ② 「フィリピンの英語」に対する眼差しに関連した「フィリピン（フィリピン人・社会・文化、日比関係を含む）」の印象とは何か。
- ③ 日本側の「フィリピンの英語」に対する眼差しの変化の傾向とは何か。

(2) 方法

本稿で扱う資料は、以下の2点を念頭に置き、主にメディア資料（テレビ報道、書籍、新聞、雑誌など）を対象として「フィリピンの英語」に関連する描写が含まれている特徴的な資料についての考察を行う。

- ① 日本語での幅広い読者・視聴者層に伝える描写
- ② 直接的な「フィリピンの英語」「日比間の英語コミュニケーション」、または関連する「フィリピン（人・社会・文化）」「日比関係」の描写

より幅広い視聴者・読者層を持つその他のメディア（テレビ全般・映画・小説・漫画など）においても、直接的/間接的に描かれる「フィリピン」「フィリピンの英語」があり、「日本側からの眼差し」の把握には重要ではあるが、今回はエンターテインメント的要素を含むメディア資料は対象としていない。

(3) 時期分類

現在に至るまでの日比関係の歴史には様々な出来事があり、それらが両国のイメージとして築かれている。日本側からみたフィリピンに対する認識のなかには、「太平洋戦争、戦後賠償、小野田少尉、革命、クーデター、ODA開発、NGO活動、保険金殺人、出稼ぎ労働者、国際結婚、農村花嫁、フィリピンパブ、バナナ、パイナップル、南国リゾート、ハーフ、芸人、介護士・看護師、特殊詐欺」などの異なるキーワードが連想されるであろう。特定の観点から、日比関係の時期区分は可能であるが、ここでは日本側の「フィリピンの英語」に対する眼差しという観点から、以下の3時期に大別し、その理由となる背景について簡略に触れておきたい。

- ① 「太平洋戦争期」

日本による占領政策が色濃く反映されており、日本側にとってフィリピンの言語事情に関する記載も散見される。アメリカ植民地支配の影響を受けた「フィリピンの英語（敵国語）」に関する描写が、日本語教育普及との関連で記されている特徴的な時期である。

③「国交回復期」

戦後のフィリピンの反日感情が残るなかで、日比関係改善の動きが加速していく時期である。日比関係の関係回復から、徐々に政治・経済・人的交流が拡大し、日本側のフィリピンに対する関心の高まりや理解の深まりも伴い、豊かな日本（敗戦国、先進国）と貧しいフィリピン（戦勝国、発展途上国）という構図のなかで、日本の経済成長を背景にした両国関係の強化が積極的に行われた時期である。日比間のコミュニケーションが意識され、フィリピン文化・社会理解の一部として「フィリピンの英語（植民地時代の影響による公用語/独特のフィリピン流英語）」に対する関心が向けられるようになった。

④「新たな動向期」

2000年代の日本市場でのオンライン英会話サービスの定着化、2010年代以降の日系語学学校の進出などの動きが顕著になる時期である。フィリピン側では1990年代後半から韓国系語学学校の進出が進み、日本からのフィリピン英語留学の参加者はいたが、日本側で広く認識されるようになった2010年頃を目安として区分を行った。『フィリピンを知るための64章』（大野・鈴木・日下, 2016）には、新たに「英語留学一親密なマンツーマン教育」が追加され、「日比関係の新時代を切り開きつつある」（鈴木, 2016, p.383）とされている。これまでの経済的な片務関係（日本の戦後賠償、ODA、日本企業進出などによりフィリピンが恩恵を受ける側）から、互恵的な関係への変化する段階として捉えることができる（井出, 2017）。

変化する流動的な政治的・経済的・文化的・社会的要因や、立場・状況

により異なる思惑が複雑絡み合う関係性を踏まえ、日本側から向けられる「フィリピンの英語」に対する眼差しの時期ごとの特徴を明らかにするため、以下では日本側からの描写内容について考察を行う。

3. 考察

3-1. 太平洋戦争期（1942～1945年）

(1) 太平洋戦争期の背景

『NHK スペシャル』のシリーズ枠で2021年から放送されている「新・ドキュメント太平洋戦争」は、戦争体験者の個人的視点から追体験する内容となっている。「1942 大日本帝国の分岐点（後編）」（2022年8月14日放送）には、1942年に陸軍省の監修のもと比島派遣軍報道部が製作した『東洋の凱歌』（比島派遣軍報道部, 1942）という記録映画の一部が含まれており、当時のアメリカ植民地支配の影響下にあったフィリピン社会の状況を伝えている。これは総力戦構築を目的とした「国家意思を効果的に伝達、普及する方途」としての映画であり、アメリカ文化の影響を反映したライフスタイルやマニラの街並み（氾濫する英語表記看板など）に関する映像には、以下のナレーションが添えられている。

（映像資料内ナレーション）

アメリカは…（中略）…美しい道路を与え、自動車を与え、ジャズを与え、映画を与え、贅沢な享楽主義を与えて、東洋への愛情を忘れさせ、フィリッピン人の魂を奪ってしまった。それは飽くなきアメリカの侵略の街であった。フィリッピン人が40年の間にアメリカ化してしまったのは当然である。同じ東洋に血を受け、東洋に生まれた人として、フィリッピン人の不甲斐なさを見るとき、我々の胸には悲しみと怒りが湧き上がってくるのを覚える。アメリカの侵略主義を一日も早く追い払い、東洋民族の誇りと喜びとを呼び返すことこそ、現在の日本に与えられた大きな使命の一つである。

（筆者による文字起こし）

また、上記の太平洋戦争当時のフィリピンの様子は、「フィリッピン人の性格を一言にして評せば東洋人にして東洋人でない」（中屋, 1942, p.35）との観察にも通じている。日本によるフィリピンの占領政策を背景とするなかで、「フィリピンの英語」に対する眼差しの特徴を当時の資料をもとに確認していきたい。

(2) 太平洋戦争期の「フィリピンの英語」への眼差し

① 言語的特徴

日本の軍政下のフィリピンを訪問した日本人ジャーナリストにより、当時の「フィリピンの英語」について以下のように書き記されている。

…二十歳代の若い學生は流石に生れて来たときから英語で育てられてゐるから英語も板についたものであるが、一般の大衆や、四十才以上のスペイン語で生活して来た老人（フィリッピンでは四十歳以上は老人に入れてよい）達の英語は全くひどい。文法もなつてゐないが、その發音と來たら到底我々キングス・イングリッシュを學んだものには想像も出來ないほどで、始めてフィリッピンを訪れた日本人は英語がわからないのに一苦勞するのである。

彼らは、大體英語をスペイン語發音で讀み、アクセントもスペイン語式に終から二番目のシラブルに置き、また文章全體として土語のやうに尻上がりで發音するのである。（中屋, 1942, p.31）

この描写の具体例として、“cover”「コーベル」、 “open”「オーペン」、 “forty”「フオルテイ」、 “cousin”「コーシン」、 “other party”「オテル・パルテイ」との癖のある發音事例を挙げている。また、こうした言語的特徴のある英語に対して、「その英語はいはゆるピジョン・イングリッシュ（原文ママ）の類である」（三木, 1967, p.551）と記述もある。

② 英語力 / 語学力（多言語能力）

当時のフィリピン人の英語力について、フィリピンの場所（都市部・地方

部) や社会階級により異なる様子が記されているが、一般的には語学の才能を有しているとの評価がある。

フィリピン人はまだ英語はしつくりた気持で使ふことができない。米国人以外が住んでゐた都市以外のところでは、スペイン語を知つてゐる方が英語を使ふよりははるかに便利であり、フィリピンとの交渉も楽であつた。(中屋, 1942, p.30)

そして彼らは語學に直別の才能を持つてゐる。先ず、彼らは非常に記憶がよい。また彼らは生まれながらの音楽家であるといはれてゐるように、鋭い音感を持つてゐる。これは語學に適する特性である。實際、彼らは一種の語學者であつて、たいていの地域人なら五六箇國語を知つてゐる。彼らが鋭い耳を持つてゐること、音楽を好むといふことは、日本語教育においても利用されねばならぬ。(三木, 1967, p.551)

③ 性格・気質

フィリピン人の性格・気質について、英語学習への積極的姿勢は、新しいものへの関心の高さや模倣に長けている性質によると描かれている。

フィリピン人が英語を學ぶことに熱心であつたのは、なんでも新しいものを真似たがる彼らの模倣性に富む性格にも基づくであろう。(三木, 1967, p.550)

④ 社会・文化 (多言語社会)

植民地支配の影響を受けているフィリピン多言語状況については、スペイン語の影響を強く受ける世代とアメリカの英語による教育政策の影響を強く受けた若い世代の差が入り混る状況が描かれており、英語教育が若い世代に多大な言語的影響を与え、上流階級がスペイン語から英語へと徐々に移行している様子が観察されている。

戦前、小學校から大學に至るまで、フィリピンの公立學校では、英語で授業が行はれてゐた。大多數の私立學校、教會の統制下にある學校、以前にはスペイン語で教へられた所でも、英語が採用されてゐた。かやうにして、フィリピンは一見英語國の觀があつた。しかし何といてもアメリカの政治はまだ日が淺かつた。英語が自由に話せるのは高等教育を受けた青年知識階級にとどまつている。知識人でも四十歳以上の者はスペイン語のほうが達者である。スペイン語がいはゆる富の貴族階級の言語であるのに對して、英語はいはば教育の貴族階級の言語である。

(三木, 1967, p.550)

また、フィリピン全土の多言語状況の複雑さを認識し、言語の使い分けが日常的に行われている状況の觀察から、将来的な国家發展には言語問題が存在していることが指摘されている。

…言語の上から見ても、フィリピンの複雑性は相當なものだといはなければならない。家庭ではスペイン語を話し、官廳では英語を使ひ、買物にはタガログ語を用ひるといつたマニラにフィリピン人の生活だけを見ても、フィリピン人が將來獨立國の國民として發展を遂げるのには、種々の面倒な問題が横はつてゐることが判るのである。(中屋, 1942, p.32)

フィリピン社会における全般的な英語の浸透度に関して、1930年代以降にアメリカから直輸入されたボードビルと映画の登場のあと、英語演劇を推奨して英語普及に努めていた様子が記されている。

英語教育を広める目的で演劇活動が政府の手によって奨励されたが英語演劇がこの国に定着するのは一九四〇年代に入ってからのものである。アメリカ統治の言論と出版の自由の保障は、三世紀にわたるスペイン時代の出版制限、検閲制度から人々を解き放ち、日刊新聞、雑誌の発行が盛んとなり多くの文学作品が生み出された。(綾部・永積, 1983, p.156)

⑤ 日本側への示唆（日比関係）

太平洋戦争開戦後、日本語教育は占領政策の軸の一つとなり、「日本語の普及と英語の使用の漸次廃止」の政府方針が示される状況下で、目的達成のためには、英語使用は不要との見解が示されたが、実際の日本語教育では「タガログ語も公用語であり、無視し得ない存在となっていた英語の使用も当座認められていた」（木下, 2015, p.225）という実態であった。授業では、明解な英語を話すことができる日本兵の担任教師から日本語の基礎を学び、日本の文字を書くことを級友とともに楽しんでいたフィリピン人もおり（木下, 2022, p.306）、文法や語彙の説明時に部分的に英語が使用されていた実態があった（神谷, 2000）。

日本軍政を大衆に滲透させるためには、暫定的に英語の使用を認めねば目的が達成できない状況にあったため、英語能力のある日本語教員がフィリピンへと派遣されたが、アメリカを象徴する英語力を持つ日本語教師が、「文明化した日本人」としてフィリピン人に受け止められ、日本語普及に貢献したことは皮肉でもあった（木下, 2022）。

3-2. 国交回復期（1946年～2010年頃）

(1) 国交回復期の背景

太平洋戦争後は、日比関係における国交回復期として位置づけられ、日本によるフィリピン占領や敗戦の記憶が残るなかで、政治・経済・文化面での交流が徐々に拡大していく時期である。ビジネスや観光を通じた日本からのフィリピン訪問者数の増加、国際結婚の増加などの人的交流の深化により、直接的な接触機会が増えていった時期でもある。出稼ぎフィリピン人女性（「ジャパゆきさん」）の存在が目目されるようになった1980年代以降、日本のメディアでは「明るく陽気で嘘つきなフィリピン人」というステレオタイプ像が繰り返されており、日本側の先入観や偏見の基盤が、不変のまま持続しているのではないかと指摘もある（清水, 1996）。戦争の記憶と戦後の直接的体験を伴った先入観や偏見が入り混じる状況のなかで、フィリピンに対

する「眼差し」が向けられた。こうした時期に、日本側の「フィリピンの英語」に対する眼差しはどのようなものだったのか、以下確認していきたい。

(2) 国交回復期の「フィリピンの英語」

① 言語的特徴

まず、戦後直後にフィリピンに渡った教誨師の英語に関する現地体験に触れたい。戦犯刑務所で死刑判決を受けた日本人戦犯の助命活動を行い、滞在中記録を残した加賀尾（1953）は、「硬い約束の響きを持つと思っていた」“OK”という意味を初めてフィリピンで知らされた経験を書き残している。

少なくとも、承知した—という約束のコトバだと思っていた。ところが、この承知した、というコトバには、どうやら「責任」というものはないものらしい。

相談をしても、OK といってくれたからといって、安心していたらとんでもない目に合わねばならぬ。

OK は、外交辞令。いわば勝手にしろ、というコトバと、紙一枚くらいの差ぐらいなものである—ということを悟るには、相当のニガイ時間を経験することが必要でありました。OK —と軽いう人物に深入りするべからず—これは、私のマニラ生活の第一課の信条としたことでした。(p.67)

この背景には、終戦直後のフィリピンの反日感情の影響もあると思われるが、フィリピン流に使用している英語の一例と捉えることができる。また、同様に中川（1986）はフィリピン人とのコミュニケーションでの“yes”について、以下の説明を行っている。

わかってなくてもイエスと言う。反対していてもイエス、半分聞いただけでもイエス、面倒くさくてもイエス、お世辞のつもりでイエス、相手を喜ばせるには、ノーというよりイエスと言う方が効果的なのはあたりまえであるから、高らかにイエスと言う。(p.44)

また、篠沢（1989）は“*I will try to come.*”（「トライ (try)」には「(恐らく) 来れない」という否定的な意味合いを持つ3種類がある）や「メイク・ラブ (make love) = 性的交渉をする」（「プロポーズをする」というフィリピンでの意味）に触れ、フィリピン独特の英語に対する私見を示している。

…僕は、このフィリピン英語の魅力に取りつかれてしまった。それは英語に対して劣等感をもっていないのだ。自分たちの、自分たち流の「英語」というものを持っている。「イエス」の意味が、英米人と違ったって構やしないじゃないか。自分たちには、自分たちの英語があるんだといった、強さとしなやかさがある。(p.187)

芝田（1990）は“*Bamboo English*”や“*Pidgin English*”との低い評価を受けてきた「フィリピン英語」について、アメリカ英語との比較で言語的特徴（音韻論、語彙、統語）の事例を提示し、その評価を明らかにしている。

（音韻論の特徴）

- ・不明瞭な母音区別 /i/と/i:/ /æ/と/a/ /ɔ/と/o/ /e/と/ei/ /a/と/ɑ/ /u/と/U:/
 - ・子音の混同 /s/と/z/ /ʃ/と/ʒ/ /t/と/θ/ /d/と/ð/
 - ・ストレスの違い フィリピン英語 アメリカ英語
- | | |
|----------------|----------------|
| character | cháracter |
| diplomatically | diplomátically |
| automatically | automátically |
| circústances | círcumstances |

（語彙の特徴）

- ・タガログ語などからの借用 the common tao (=男), balangay (=最小限の政治単位) など
- ・タガログ表現の翻訳使用 Open the radio. (=Bukusan mo ang radyo.) (正) Turn on the radio.
Close the light. (=Isara mo ang ilaw.) (正) Turn off the light. など
- ・意味が異なる語彙 stick (=cigarette), diversion (=entertainment), green (=obscene) など

- ・創造された語彙 conformtroom/CR (トイレ), bedspacer (食事抜きの宿を借りる常連者), banancue (特別仕立のバナナ) など

(統語の特徴)

- | | フィリピン英語 | アメリカ英語 |
|--------------|----------------------------|------------------------------|
| ・語順 (土着語の影響) | I have seen you already. | I have already seen you. |
| ・否定文の also | He hasn't seen Maria also. | He hasn't seen Maria either. |
| ・自 / 他動詞用法 | Did you enjoy? | Did you enjoy yourself? など |
- (pp.179-188 より抜粋)

フィリピン英語はアメリカ英語の構造と似通っている箇所が多分にあると思われる。アメリカ英語の影響が大きいことは否定できない。しかし、音声や語彙には、数多く存在する諸土着言語とその方言に基づいているものが多い。即ち、複数の土着言語とアメリカ英語の結合によってできたのが今日のフィリピン英語である。したがって、フィリピン英語の特徴は、土着語の特徴を反映しているとも言える。その意味で、構造的にはアメリカ英語らしく見えるかもしれないが、コミュニケーションの手段として国際的に通用するかは、また別の問題である。(p.189)

この時期以降、フィリピン独特の英語の特徴が一般読者向けに紹介され、その正当性始める。以下、「フィリピンの英語」の紹介を含む書籍一覧を提示する (表1)。

1990年から2000年半ばに出版された書籍は、主に言語関連の専門家による「ノンネイティブ英語の正当性」や「英語の国際化と多様化」の実情が記載されている。フィリピンを含む箇所には、フィリピン文化・社会に根差す独特の英語やフィリピンの歴史・文化・社会の概要、独特の英語の特徴 (発音、アクセント、語彙、文法など)、「自分のことば」としての英語に対する意識、言語 (教育) 政策などが含まれ、「フィリピン英語」から考える日本の英語学習や英語教育の参考点についての言及も散見される。

【表1】「フィリピンの英語」を含む主な書籍（1990年～2000年半ば）

出版年月	書名	作者	出版社	フィリピンの掲載有無
1990年 12月	『アジアの英語』	本名編	くろしお出版	「フィリピンの英語」 (芝田) (pp.157-192)
1994年 5月	『暮らしがわかるアジア読本 フィリピン』	宮本・ 寺田編	河出出版社	「フィリピン英語」 (赤嶺) (p.108)
1999年 3月	『アジアをつなぐ英語』	本名	アルク	「フィリピンの英語」 (pp.88-96)
2002年 11月	『アジア英語辞典』	本名編	三省堂	インド、シンガポール/ マレーシア、フィリピン 英語
2002年 5月	『事典 アジア最新英語事情』	本名編	大修館出版	「フィリピン [共和国]」 (河原) (pp.199-213)
2003年 11月	『世界の英語を歩く』	本名	集英社	フィリピン関連 (pp.68-76)
2005年 4月	『アジア英語教育最前線』	河添	三修社	「フィリピン」 (pp.203-206)
2005年 8月	『アジアの視点で英語を考える』	祖慶	朝日出版社	「フィリピン」 (pp.76-83) 音声 CD 有
2006年 3月	『英語はアジアを結ぶ』	本名	玉川大学出版	「フィリピンの英語」 (pp.99-107)
2006年 11月	『アジア・オセアニアの英語』	河原・ 川畑編	めこん	第1章「フィリピン」 (pp.11-43)

(出所) 筆者作成

② 英語力 / 語学力 (多言語能力)

一般的なフィリピン人の英語力の傾向については、社会的経済的地位の高いほどよく使い、運用能力も高い傾向があり、農村部よりも都市部、高年層よりも若年層の使用率が高く、性差はないという傾向がある (本名, 2003)。また、フィリピン人は「語学の大家」であり、フィリピンでの教育を通じて身に着けた英語は「自分のことば」として認識されている。

フィリピン人はおそらく世界中でも有数の「語学の大家」といわれている。
… (中略) …フィリピンでは「英語という外国語」を必修科目として学ぶの

ではなく自然のうちに英語を覚えてしまうので、外国語という意識はまずないのである。(花彩, 2000, p.115)

このように無意識のうちに身につけた英語力には、育ってきた環境や教育水準などによる能力差が存在し、英語が堪能な人々と堪能ではない人々のあいだに溝を生み出している社会状況があることから、フィリピンの将来への懸念も投げかけられている。

…、フィリピンでは「英語を知らないことは、物事を知らないことに等しい」と無意識に思ってしまう風潮があるとか。つまり、英語を理解しない人を無知・無学であるとみなしてしまう傾向にあるらしい。…(中略)… そのような上から目線的な意識がある一方で、英語ができない人々は、英語を多用する同胞に対して「気取っている」「別世界の人」という感情を抱くようである。…(中略)… 英語を話せれば活躍の場が世界に広がり、フィリピン人個人にとっては有利であろう。しかしながら、英語の理解度に大きな差があり、英語の使用が子供達の学習にも影響を及ぼしているとするならば、国としては必ずしも有利ではないのではないか。もちろんフィリピンにしてみれば、英語の苦手な日本人にこんなこと言われても余計なお世話だろうけど。(鈴木, 2012, p.60)

さらに、フィリピンのアメリカによる植民地支配の経験を反映した言語状況について、歴史的観点からフィリピン国家の活力を奪う混乱と捉え、国家と言語の関係と国民意識に対する否定的な見解も記されている。

人々は英語とフィリピン語を自由に相互乗り入れさせる“タグリッシュ”で暮らしている。小学校からの二言語教育で、英語が国民の日常用語になったわけではなく、それはあくまでお仕着せの言語に留まっている。歴史的にみると、英語教育はフィリピン人に劣等意識を植えつけ、アメリカ文化に侵させる「エサ」として提供されてきた。フィリピン政府が「世界言語としての英語の知識は、フィリピン国民の誇りである」と言えらうほど、国民意識をあいまいにさせている。(鈴木, 1997, pp.293-294)

③ 性格・気質

他国に比べて「高い言語能力（英語能力）」を有していることへの自信が、フィリピン人としての自己肯定感の拠り所になっている傾向があるとの指摘もある。

…「フィリピンは世界第二の英語国」とまで豪語しているフィリピン人すらいるくらいである。「世界第二」というのは人口において、米国に次いでフィリピンが第二の英語国だということである。英国もカナダもオーストラリアもフィリピンより人口が少ない。インドやパキスタンはフィリピンより人口は多いが文盲も多いので、本当に英語が話せる人口を数えればフィリピンの方が多、ということである。アジアの中でとかく蔑視されがちなフィリピン人が日本人にも中国人にも韓国人にも優越感を感じるのはその英語力に話が及ぶときである。ほかのことはともかく、こと英語力に関する限り自分たちの方が上だということである。（花彩, 2000, p.117）

上記の描写にある英語力を積極的に自己肯定する姿勢は、公用語や教育言語としての英語の役割や高い英語力が社会的ステータスを表すシンボルとなっている国内状況もあるであろう。また、アメリカの真似をするフィリピン人が「小柄な褐色のアメリカ人（little brown American）」と揶揄されたことや、1950年代以降に目覚ましい経済成長や産業発展を遂げてきた新興アジア諸国に比べて遅れを取ったために「アジアの病人（sick man of Asia）」と呼ばれてきた時代を振り返ると、「抑圧からの解放」と「自尊心」が複雑に絡み合った自己評価とも考えられる。また、英語力への肯定的視点は河原（2002）の「フィリピンの英語話者の数は、世界で第3位、アジアで第1位である、とフィリピン人は自国の英語力をよく自慢する」（p.199）との描写とも本質的に一致している。

④ 社会・文化（多言語社会）

『フィリピンの事典』（石井, 1992）の「英語」という項目には、フィリピ

ン独特な発音や英語圏としてのフィリピンの記載があり、その歴史的背景も簡略にまとめられている。

(アメリカ合衆国は) … (中略) …各地に学校をつくり、アメリカ人教師を送り込み、アメリカ英語による民主主義の教育を行った。スペイン人がスペイン語の共通語化を嫌ったのに対して、アメリカ人はフィリピン諸島全土の一般民衆に英語を広め、共通語化を推し進め、公用語の1つとした。フィリピン英語は、発音に独特なものがあるが、あらゆる教育機関で使われ、英語文学も発達しているため、フィリピンは英語圏の国といってもよいほどである。また、このような英語による高等教育を行ったため、高等教育を受けた人は、フィリピンの言語と英語の2言語併用者であり、彼らの会話にはコード・スイッチングという現象が多々起こる。(p.75)

フィリピン人の日常的なコミュニケーションで頻繁にみられる「コード・スイッチング」(code-switching)は、状況に合わせて切り替えて使用する言語能力の高さを示す言語行為だといえる。フィリピン人は多言語状況下で複数の言語あいだを自由に「行ったり来たり」する能力があるとし、この言語の選択肢に英語があることがフィリピンの特徴である(岡部, 2017)。

…フィリピン人は幼いうちから、家庭では現地語、学校ではフィリピン語と英語を学び、思考し、その間を自由に行ったり来たりするのである。さらに、現地語やフィリピン語に、英語やスペイン語、中国語などの表現をも柔軟に取り入れて、オリジナルにカスタマイズされたといっても良い言語環境を形成している。実用的には、相手と状況に自らを適応させてコミュニケーションをとることができるフィリピン人の「行ったり来たり」のうまさには多くの効用があるといえる。他のアジア諸国のなかにも同様の多言語状況が存在しているが、英語という要素が媒介する点がフィリピンの1つの特徴といえよう。(p.37)

⑤日本側への示唆(日比関係)

タガログ語と英語が混合した「タガリッシュ(現在は Tag(alog) + (Eng)lish

のタグリッシュが一般的な呼称)」や「カラバオ（国獣である水牛）・イングリッシュ（carabao English=broken English）」とも呼ばれる「フィリピンの英語」を肯定的に捉え、日本人の英語について言及をしている。

彼らのタガリッシュ（タガログ英語）、またの名を「カラバオ・イングリッシュ（フィリピン名物の水牛「英語）」というもう一つの英語は、日本人にもとても参考になるように思う。英語という言葉が、借物である時代は終わって、その英語という道具でいろいろな国の人々とやりとりができることだけは確かなのだから、自分たちの英語があっという間のだろう。米国式や英国式の英語でなければならないということは、まったくないのだ。…（中略）…アジアの英語、フィリピンの英語から、日本人の英語を考えることも大切だと思う。もちろん、英語じゃなくなっただけ一向に構わないし、英語がこうして世界的に通用していることの歴史的意味を考えることも大切だ。（篠沢, 1989, pp.187-188）

アメリカ植民地支配後のフィリピン多言語状況における英語使用に対しては、積極的な意味を見出す肯定的評価もあるが、その言語使用領域については否定的な見解も示されている。

フィリピン文化のありようも、この国のイメージを散漫にしている。スペイン、アメリカの文化が国民の血肉にまで溶け込んでいることを批判しているのではない。フィリピンは外国文化を選択的に採り入れ、豊かなフィリピン文化を築いているからだ。ところが、アメリカ文化に共鳴するあまり、国民会議で使われる言葉がいまだに英語であり、年一回の大統領教書も英語で発表される現状は、控えめに言っても理解しがたい。（鈴木, 1997, p.293）

第3世界が向き合う困難な状況のなかで、自己のアイデンティティーを獲得する手段と、国際場面において自己を表現する手段を同時に手に入れた経験（特に英語の社会的役割、英語に対する態度、英語教育の方法など）は、日本にとっても示唆に富み、参考となるとの肯定的な評価もある（本名、

1990)。たとえば、アメリカによりフィリピンに持ち込まれた英語は、フィリピン人にとって、西欧の文化を伝達する導管ではなく、自国の文化を表現する媒体であり、フィリピンの詩人の言葉（“The English language is now ours. We have colonized it, too.”）を引用し、日本人もこのような心意気を学ぶべきではないだろうかとの指摘がある（本名, 1999）。また、言語学者の鈴木（2001）は、社会や文化についても学ぶことの重要性を念頭に、アジアで英語を学ぶ意義について言及している。

私が学生に向かって「フィリピンに行ってみなさいよ」といくら言っても、「英語を勉強したいのにフィリピンに行くなんてどうして?」と怪訝な顔をする。私は「フィリピンに行って、そこで社会を立派に動かしているその英語を勉強しておかないと駄目だ。インドやシンガポールに留学して、英語を学ぶと同時にその社会や文化を学んで来い」と言うのですが。(p.200)

現地での学びのみならず、フィリピン人の高い英語力を日本の英語教育で活用するという発想から、「フィリピン英語」からフィリピン人への理解へ、そして世界のさまざまな文化表現への気づきへとつながる可能性を踏まえた提案も行われている。

…ALTとしてのフィリピン人の採用、フィリピンへの語学研修留学、教科書でのフィリピン英語の紹介などが考えられるだろう。フィリピン英語を理解することで、フィリピン人への理解が深まり、さらには、英語には世界のさまざまな文化を表現する力があることに気づくようになるだろう。とにかく、英語はもう世界の人々のことばであり、英語学習の目的とは、英米人だけではなくて、世界のさまざまな人とコミュニケーションするためにあることを忘れてはいけない。(河原, 2002, p.212-213)

最後に、「国交回復期」のフィリピン言語状況を前提とした「フィリピン英語」の「商品としての価値」に関する当時の見解があり、2010年以降の「新たな動向期」との関連において、「日本とフィリピンをつなぐ英語」の状

況について考察を行う際に興味深い指摘である。

一応、フィリピン英語が商品としての価値を認められたとしよう。また、言語の特徴も規則的であることがわかったとしよう。しかし、フィリピン英語がいかに正当な言語として認められたとしても、今度それが必ずしも教育言語としてふさわしいかが問題となる。フィリピン英語が英米人および英語を第2言語もしくは外国語として使用する人々に認知されるかどうかは、フィリピン英語を話者として使用する者にとっては大きな問題である。果たして、教師はどの英語を標準英語、即ち教育言語のモデルとすべきかを考えると、不安にかられる。この問題は複雑でかつ大きい。

…(中略)…フィリピンの大部分の英語教師や教材開発者たちは、こぞってアメリカ英語を標準英語として選んでいる。少なくともアメリカ英語を教育言語としてふさわしいと考えている人が多いことは否定できない事実である。(芝田, 1990, p.176)

この見解には、「フィリピン英語 (PE)」の商品価値が認められた状況を仮定としており、「国交回復期」に続く2010年頃以降の「新たな動向期」への移行、両時期における「眼差し」の特徴(評価や価値判断)を比較検討する際の参考となる。また、日本とフィリピンの関係において、「(フィリピン英語が)英語を外国語として使用する人々に認知されるかどうかは、フィリピン英語を話者として使用する者にとっては大きな問題」であった当時の状況が、どのように「フィリピンの英語」が商品価値を生み出し、「日本とフィリピンをつなぐ英語」になったのかについて考察の必要性があることを示すものである。

3-3. 新たな動向期 (2010年頃～現在)

(1) 新たな動向期の背景概略

ここでは、2010年以降に顕在化してきた日本の英語学習環境の変化について、フィリピンとの関わりの観点から簡略に整理をしておきたい。1990年代後半に多くの韓国系資本による現地語学学校の進出があり、この背景に

は韓国国内の1997年のIMF危機の経験とその後のグローバル戦略への舵を切った状況がある。

韓国人学生の英語力を低コストで短期間に成長させる需要に応えるかたちでフィリピンへ進出した韓国系語学学校の存在がある。すでに2000年代の英語学校の存在は日本のメディアも注目しており、フィリピンが「安くて、近い」英語留学先であるとして、韓国人学習者の急増が報じられている（朝日新聞, 2008）。

日本側で2000年代には語学学校設立ブームが起き、現地の語学産業の基盤が作られつつあるなか、BPOビジネスの環境整備・改善も伴い、インターネットを通じた英会話サービスの提供も日本市場向けに開始され、スカイプを利用した「格安英会話」が主に社会人の間で認識され、成長産業として報じられている（日本経済新聞, 2010）。「安く、楽しく、手軽な」勉強法（加藤, 2011）の「スカイプ英会話」は、その後「ネット英会話」「オンライン英会話」とその名称を変化させながら、現在も多くの英会話事業者が大人から子供までの幅広い学習者層を対象に英会話レッスンの提供が行われている。オンライン英会話は、社会人や企業研修のみならず、日本の公教育にも取り入れられ、大学の単位認定や正課外活動としての導入などの動きもあり、フィリピン留学とともに効果的な英語学習法として定着していった（日本経済新聞, 2013）。

2012年9月26日にはNHKがフィリピンの英会話ビジネス（オンライン英会話と英語学校）の舞台裏を取材したドキュメンタリー番組（「激戦！英会話ビジネス ～アジアの英語大国 フィリピンは今～」）が放映され、日本の大学生のフィリピン語学留学を大学のグローバル人材育成カリキュラムへ取り入れることも視野に入れていることが伝えられている。その後もニュース番組内などで「オンライン英会話」や「フィリピン英語留学」が取り上げられ、社会人のみならず、中高生や大学生、シニア世代や子供（親子）もフィリピンで英語を学ぶ状況が報道された。

日本での「オンライン英会話」の知名度向上や人気により、「フィリピン

留学」が「短期集中で英語を身につける」ことのできる費用対効果の高い学習方法として紹介されるようになり、フィリピンの英語学校は観光ガイドブックにも登場する。『地球の歩き方 フィリピン '12~'13』（地球の歩き方編集室, 2011）には、「自分磨きの旅」として「フィリピン語学留学」が特集され、「費用の安さ」「フレンドリーな国民性」「短期間でも OK」という特徴とともに、マンツーマン・レッスンによる英語力向上にも触れられている。

また、ビジネス雑誌などの英語学習法に関する記事では、フィリピン英語留学が含まれる機会が増加し、社会人の英語研修先としてフィリピンを選ぶ日本企業の増加も紹介され、「英語を学ぶならフィリピン」との認識が定着していった。2012年には韓国に続く形での日系資本による英語学校開校や今後の開校予定が報じられ、「日系英語学校の開校ブーム元年」（朝日新聞, 2012）を迎えた。

こうした「フィリピンの英語」を利用した英会話サービスを背景に、雑誌『AERA』（2015年3月2日号）は「フィリピン英語革命」という特集で、セブの英語学校の状況や留学中の滞在を楽しむ「エデュテートメント（教育と娯楽）」要素の大切さを伝えている（朝日新聞社, 2015）。とりわけ、セブの場合は「治安の良さ」や「南国の楽園」などのイメージも伴い「セブ留学」として知られるようになった。英語学習時間においても「フィリピン留学1週間で駅前留学1年分の学習効果」（毛利 2015, p.26）という費用対効果の高い「安・近・短」のフィリピン英語留学（日本経済新聞, 2018）が日本側で定着していった。

「オンライン英会話」「フィリピン英語留学」の認知度の高まりと効果的な学習法としての定着化を背景に、「フィリピンの英語」は次第に日本の公教育分野にも組み込まれ、現在も全国の各段階の教育機関へと広まりつつある。当初は社会人や個人英語学習者を対象としていたが、企業研修や教育機関の語学研修へと拡大し、主に私教育での実績と経験を重ねてきた「フィリピンの英語」は、「話す」「聞く」を中心とするコミュニケーション能力向上

という課題に直面している公教育の英語教育との接点を「オンライン英会話」「フィリピン英語留学」「フィリピン人ALT」を通じて持つことになる。日本における「フィリピンの英語」の動向については別稿（小張, 2021）で概略を整理しているが、ここでの背景把握にも有用であるため、以下に提示しておきたい（図1）。

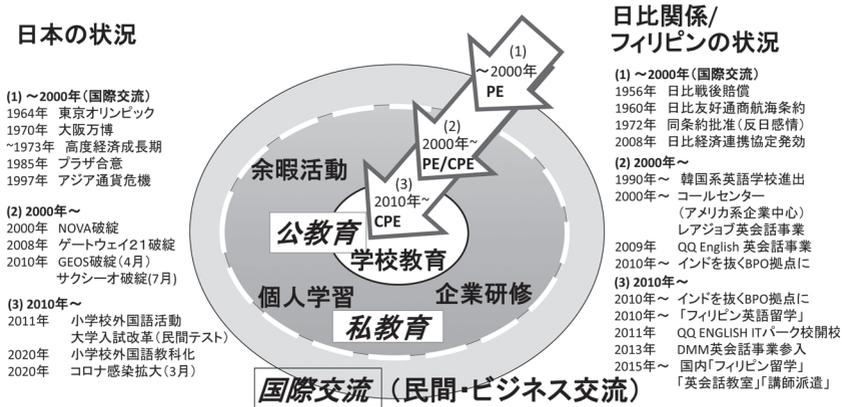


図1. 日本における「フィリピンの英語」の動向（小張, 2021, p.13 より掲載）

(注) PE (Philippine English) = World Englishes 論における国別変種としての「フィリピン英語」

CPE (Commodified Philippine English) = 国際的ビジネス環境で商品化・コモディティ化傾向のある PE を基礎とする「フィリピンの英語」

(2) フィリピンの英語

① 言語的特徴

「フィリピンの英語」が身近になった日本の英語学習環境では、どのような眼差しが向けられてきたのであろうか。ここでは「オンライン英会話」「フィリピン英語留学」を通じて接する「フィリピンの英語」に対する典型的な描写を事例の特徴を確認したい。

フィリピン訛りの英語はfの発音がpに聞こえたり、Rが巻き舌になったり、bとvの区別があいまいだったり…と、アメリカやイギリスで話される標準的な英語とは少々発音が異なっている人もいます。…(中略)…講師としてしっかりとトレーニングを積んだフィリピン人たちの英語は、ネイティブと遜色ないレベルであることが珍しくありません。(高城, 2013, p.92)

英語が公用語であるとはいえ、確かに欧米ネイティブとは異なりますから、特有の訛りも存在します。しかし、これも気にする必要はないと私は考えます。まず、フィリピン留学では欧米留学のように現地住民と接する機会のごくまれで、訛った英語を聞く機会はほとんどありません。たまの休みにマーケットへ行ったとき、店主からフィリピン訛りの英語で話しかけられたからといって、それが移るという話にはなりません。もちろん講師は、キレイな発音ができる人ばかりです。(中川, 2015, p.30)

また、英語(グローバル・イングリッシュ)を道具として使いこなし、世界とのコミュニケーションを行っていくために、日本の大学教育へのセブ英語研修の導入、その意義や優位性(短期集中型研修、マンツーマン・レッスンの効果など)を紹介するなかに、フィリピン人英語講師の言語的特徴についての言及がある。

…「フィリピンの英語なんか英語じゃない」という声を聞くときがある。しかし、それは、フィリピンの街に溢れる強烈なフィリピーノ訛りをフィリピン語学学校講師陣も同様に話すのだろうと推測して発せられた言葉であって、フィリピンの語学学校の講師(ほとんどは大卒)たちは、一様に訓練を受けているので、世界中のどこでも通用するグローバル・イングリッシュを話す。…(中略)…実は、本当の意味で英語教育に精通しているネイティブスピーカー講師程、フィリピン人英語講師の英語がハイレベルにあると口を揃える。(中川, 2015, p.46)

フィリピン社会のなかには、人により異なる特有の英語訛りの存在を認識しているものの、英語講師としてのトレーニングを受けた英語教師の英語は

「ネイティブ並みの英語」「キレイな発音」「世界で通用する英語」と受け止められている。

② 英語力 / 語学力 (多言語能力)

フィリピン人の英語力を活用した英語教育サービスだが、オンライン英会話事業の立ち上げを決めた経営者の視点には、英語力のある程度保証する「エリート大学卒」があり、全般的に「高学歴 = 高い英語力」という学歴を英語力の評価基準とする描写も確認できる。

講師として採用するのは、フィリピン大学の学生または卒業生に限定してきました。講師の候補となるのは、フィリピン国内でも特に英語が堪能なトップエリートという人材ばかりなのです。(加藤, 2011, p.60)

教育を公用語である英語で受けるため、大学を卒業している人たちは流暢に英語を話せますし、スーパーマーケットの定員、マクドナルドの定員、タクシードライバー…皆、英語を話すことができます。(太田, 2011, p.29-31)

つまりフィリピン人も日本人と一緒に、生まれつき話せるわけではなく、勉強して学んできたわけです。自然と話せるようになったわけではなく、学んで話せるようになってきた人だからこそ、教えどころがわかるとは思いませんか？(一部の上流階級のフィリピン人家庭は、教育方針で第一言語を英語にしてネイティブとして育てる場合もありますが、少数派です)(太田, 2011, p.45)

アジアの多くの英語講師は大学を卒業した方です。ですので、彼らの発音はきれいですし、文法もきちんとしたものです。英語講師として雇われるような人は、大学への入学やきちんとした企業での就職のために、会話だけではなく、文法、学術的な語彙、ライティングもしっかり学習しているからです。(星野, 2013, p.58)

フィリピン訛りへの懸念については TESOL (資格英語を母語としない者

を対象とした英語教授法の国際資格)を取得しており、「発音の美しさや正確さは何らネイティブと変わらない」(田村, 2015, p.97)との説明もある。また、「公用語」や「英語能力を示す外部指標」に言及することで、フィリピン人講師の英語能力の高さを示す描写も確認される。

英語はフィリピンの公用語の一つであり、講師はほぼネイティブと同様に英語を使いこなしています。「英語を母語としない人の英語習熟度」に関する調査* (2013年)において、フィリピンは第位1位を獲得しました。*Global English社による(太田, 2016, p.4)

また、フィリピン人の持つ英語力の高さに加え、語学学校の経営者からみたフィリピン人の教師としての資質が以下のように描かれている。

イギリスやアメリカのプロの先生はすごいと思います。ただ、街の中の英会話教室でツーリストが教師として教えるところと比較したら、専門の教育を受けたフィリピンの先生の方が上手だと確信しています。こんなことから、私は、フィリピンに英会話の学校をつくったのです。(陰山・藤岡, 2015, p.58)

特徴的描写として、教育力についての言及も散見され、その背景には個人差はあるものの「高い英語力+高学歴+英語訓練+教育スキル(+良識・品格) = 優秀な英語教師」などの思考があるように思われる。

また多くのフィリピン講師は、その語学能力や教えるスキルの点でも不足はない。英語が公用語といっても、一般のフィリピン人はなまりのあるブロークな英語なのは事実である。…(中略)…大学で英語学を修了した人や第二母国語として英語を学ぼうとする人向けの専門知識を習得した人、教育者としてのライセンスを保持する人など、その道のプロフェッショナルが数多く集まっている。中には教えるのがあまりうまくなく、仕事に熱心でない講師もあり、レベルにバラつきもあるのも確かであるが、これはフィリピンだけ

に限る話ではないだろう。(高城, 2014, p.114)

フィリピン人講師の多くは成績の優秀なエリートで、かつ育ちも確かな人が多いという事実です。もしかすると、公用語とはいっても片言で大した英語を話していない、と考えるしまう人もいるかもしれません。確かに年配のフィリピン人のなかには英語が達者でない人もいますが、公用語化した30数年前以降は国を挙げて英語教育に取り組んでおり、卓越した英語能力を備える若者は多いのです。実際、フィリピンは日本以上に教育格差が激しいため、講師となるほど英語力を身につけた人というのは、学業に秀でたエリートといえるでしょう。そこまで教育にお金を費やせる家庭で育ったともいえますから、良識と品格を備え、頼りになる講師ばかりです。(中川, 2015, p.28)

また、フィリピン人英語教師がノンネイティブ話者である点について、日本の英語学習者にとってはメリットであるとされている。

英語母国語話者ではない弱点を共有しているゆえに、マンツーマン・レッスンにおいて、フィリピン人講師は、日本人の視点に寄り添い、日本人の英語に忍耐強くつき合う寛容さを、英語圏のネイティブたちより少し多めに持ち合わせていると言える。日本人 EFL 学習者にとってフィリピン人 ESL 講師は、強い味方なのである。(福屋, 2015, p.45)

非ネイティブの先生は、英語ができない生徒の気持ちをわかったうえで教えてくれます。先生として英語を熟知していることはもちろん大切ですが、それだけでなく、自分が英語学習者としてがんばった経験もまた、先生としての素質に大きな影響を与えているのです。…(中略)…フィリピン人に英語を学ぶことには大きな価値があるのです。(中谷, 2016, p.45)

③ 性格・人柄

フィリピンでのオンライン英会話の事業運営に欠かせない最も重要な要件は「優秀な講師」であるが、その要因のなかに「他者の気持ちを汲み取る

うとし、相手が喜ぶことに幸せを見出す国民性」(加藤, 2011, p.61) もあり、明るく話しやすい性格である講師との点も強調されている。

フィリピンに足を運んだことで、フィリピンの人々が持つ可能性を強く感じられたことも収穫でした。少し話してみただけでも、フィリピン大学の学生が非常に優秀であることはすぐわかりましたし、何よりも、出会った人々がみなホスピタリティーにあふれていることに感動しました。(加藤 2011, pp.135-136)

フィリピン人は明るくノリのよい性格で誰とでも気さくにコミュニケーションを取ることができます。…(中略)…フレンドリーな講師たちがあなた待っています。(毛利, 2015, p.31)

④ 社会・文化 (多言語社会)

フィリピンの多言語状況全般についての紹介もあるが、とくに英語に関しては「英語公用語国」や「英語話者数の多さ」が付言される描写が目立つ。

フィリピンは英語公用国のため、街中でも買い物でも英語を使うことが必要になります。覚えた英語をすぐに実践することができるのです。つまり、授業時間以外でも英語と常に接する環境があるということです。(太田, 2011, p.4)

フィリピンは、英語を話す人口が、世界で3番目に多いとされています。19世紀末から第二次世界大戦終了の約40年間、アメリカ領だったからです。…(中略)…その時代に、アメリカによって徹底的に英語教育が行われました。(安藤, 2016, p.25)

⑤ 日本側への示唆 (日比関係)

フィリピン人英語教師による英語レッスンに関する懸念として、過去の日比関係におけるアジア各国から日本に出稼ぎ女性に対する「ジャバゆきさ

ん」のイメージについての言及があるが、日本の若者世代にはほとんど影響していないとの認識が記されている（陰山・藤岡, 2015）。

もう一つ、フィリピンの先生と英語の勉強をするということに抵抗はなかったかということも気がかりでした。失礼な話ですが私くらいの年齢ですと、フィリピンと聞くとフィリピンパブしか連想しないのです。今の若い人は、フィリピンに対してそういうイメージは全くないようですね。同じアジアで、英語を話すことができる人として、普通に尊敬してくれているという感じでした。なんの先入観もなく、フィリピンの先生と純粹に英語を勉強してもらって、学習効果があったと言ってもらえたことがとても嬉しいことでした。（p.74）

留学アドバイザーである星野（2013）は、アジア英語留学の全般的な傾向として「英語初心者の場合、アジアの英語講師の方から英語を習う方がスムーズに進む場合が多い」（p.56）と述べているが、フィリピンに関しても「初級者～中級者」向けという記載が多くみられる。

フィリピン留学ですが、最も向いているのは英語初級者の方でしょう。まさしく僕のような人のことです。また、英語知識（TOEIC スコア等）はあるものの、英会話の経験値が乏しい方にも向いています。（太田, 2011, p.44）

また、日本に住んでいる人の場合、日常で英語を使う機会がほとんどありません。そのため座学が中心となってしまう、TOEIC で高得点を取得しても実際の会話で使用することはないため話せないという方も大勢います。そんなスピーキングの練習量が足りていない方々に、フィリピン留学は最適と言えるでしょう。（毛利, 2015, p.28）

実際に、セブを筆頭とするフィリピンで英語を学ぶ留学生は、国籍を問わず初級レベルの人が大半です。（安藤, 2016, p.29）

さらに、日本の英語学習者に向けて、フィリピンで英語学習後に別のネイ

ティブ英語圏に留学したり、世界旅行やワーキングホリデーに参加したりする「2 개국留学」プランや、英語力を維持するための「オンライン英会話」との併用についての提案も行われている。

最終的にアメリカに留学したい、カナダに留学したい、そう思っている人もまずはその準備としてフィリピンで英語を学ぶことをおすすめしますし、もし予算がある人はフィリピン留学期間を3ヶ月～半年とし、その間に英語初級者を脱し、英語に自信をつけたその後は他国へ渡るといった選択肢はアリでしょう。

実際にフィリピン人の英語を話す速度はネイティブに比べると遅めです。発音も日本人には比較的聞き取りやすいでしょう。他国留学はフィリピン講師と意思疎通が十分にできるようになってからをおすすめします。フィリピン人の講師との意思疎通も怪しい状態でネイティブの国へ行くと、かなり厳しいことになると思います。(太田, 2011, p.105)

しかし、初級者～中級者向けの英語留学における英語学習上の留意点についての指摘もみられ、英語学習ではノンネイティブ英語教師との教育的なやり取りが中心になることにも触れられている。

フィリピンで英語を学ぶことで最低限の英会話をマスターすることは可能であるが、ここでの学習のベースはTOEICなどのペーパー試験であり、国際社会で使われている実際の会話とはやはりズレがある。フィリピン人講師たちは優秀で、英会話の教え方もうまいが、やはり多くは海外生活経験がなく、世界で使われている英語に対する経験や文化的背景は持ち合わせていない。(高城, 2014, p.116)

留学中、話す相手の99%は先生であり、彼らは学生の語学力を理解した上で寄り添った形で話してくれますから、まったく初対面のネイティブ相手の会話はあまり経験できません。初対面のネイティブ相手の会話こそ「生きた英語」が使われ、ちょっとしたニュアンスの違いがコミュニケーション不全になるシビアナやりとりが行われるもので、タフな心を磨けるわけですが、そ

うしたシーンはほとんどないでしょう。現地教会や孤児院などでボランティアに参加することも不可能ではありませんが、日中の貴重な授業を無駄にしてまで参加する意義は薄いと思います。(中川, 2015, p.174)

4. 日本側からのフィリピンの英語に対する眼差しの変化

(1) 3つの時期の特徴

これまで、日本側からみた「フィリピンの英語」についての描写を、3つの時期に大別して特徴的描写に着目してきたが、ここでは各時期ごとの「フィリピンの英語」に対する眼差しの特徴について整理をしたい(表2)。

上記の各時期における日本側から向けられた「フィリピンの英語」に対する眼差しの特徴は、「太平洋戦争期」のアメリカを象徴する敵国語としての否定的評価、「国交回復期」のフィリピン独立後のアメリカ植民地支配の象徴としての消極的評価やフィリピン英語変種の正当性を主張する証拠としての積極的評価、そして「新たな動向期」の英語学習モデルとしての肯定的評価へと変化していったことが伺える。

いずれの時期においても、「フィリピンの英語」の言語的特徴、社会の多言語状況についての認識は確認できるが、その言語的特徴を「訛り」「創造的な独特の語彙や表現」「国際的基準から外れたモデル」「訓練された教育モデル」などとして捉えるかは、主体(日本側)の評価基準・尺度の変化による評価の違いは当然であり、その価値判断も異なってくる。3時期ではそれぞれ異なる目標が意識され、日本側から向けられた眼差しには、時期ごとに異なる評価基準・尺度をもとにした「フィリピンの英語」の価値判断がなされ、異なる「フィリピンの英語」の姿が日本側で共有されてきた経緯があるように思われる。

「太平洋戦争期」には日本軍政のフィリピンでの日本語普及と英語使用廃止の方針のもと、日本語普及の目的のために英語を使用せざるを得なかった逆説的な状況があった。アメリカ支配の影響の象徴である「フィリピンの英

【表2】日本側からの「フィリピンの英語」に対する眼差しの変化

「眼差し」の種類	太平洋戦争期 (1941~1945)	国交回復期 (1946~2000)	新たな動向期 (2000~現在)
一般的認識	「英語」(English)との接触 敵国語のアメリカ英語	「フィリピン英語」(PE)との接触/学術的関心の高まり	「フィリピンの英語」(CPE)への関心の高まり
英語 (言語的特徴)	- アメリカの英語(敵国語) - スペイン語訛りの英語	- 言語特徴の記述 - 英語変種の正当性(PE紹介、辞書など)	- 訛りある(気にしない) - 教師はきれいな英語
英語力/語学力 (多言語能力)	- 日本人より高い英語力 - 世代による能力差(若者が高い英語力)	- 高い英語力、語学の天才 - 社会階層による英語能力差 - 英語力への肯定感	- ネイティブ並み - 高い英語力(高学歴) - 教授法の訓練・認定証
フィリピン人	- 東洋民族の誇りと魂を奪われた民族 - 模倣性に富む性格	- 明るく陽気で嘘つき - 空気を読む(コード・スイッチング)	- 優秀なノンネイティブ教師 - 高学歴 - ホスピタリティーに富む
社会・文化 (多言語社会)	- アメリカ植民地支配の影響(英語による文明化) - 若い世代に英語が広く浸透 - 言語の使い分け	- 多言語社会 - 英語がステータスシンボル(社会経済的位置の指標) (高学歴の指標)	- アメリカ英語の影響 - 公用語 - 英語の流通度が高い - エリート層の英語
日本側への示唆 (日比関係)	- 日本語普及の補助手段としての英語 - 英語使用の漸次廃止	- 英語の国際化・多様化 - 新たな英語観(自分のことば)	- 日比互惠関係(英語教育) - 初級~中級者向け - 教師とのコミュニケーションが中心

(出所) 筆者作成

語」の使用廃止を最終目標としているものの、日本の植民地経営に有効な言語的手段として道具的価値を英語に見出している。

「国交回復期」には、各国家の独立性を尊重する国際協調体制の構築や脱植民地化への世界的潮流がある一方で、旧宗主国の影響が依然として残る旧植民の新植民地主義的仕組みも継続されてきた。これらを背景として、戦後の日本(敗戦国、加害者)とフィリピン(戦勝国、被害者)との交流が徐々

に拡大し、友好的な両国の結びつきが深化していった。この時期の「フィリピンの英語」への眼差しは、「アメリカ英語」の複製版・廉価版としてだけでなく、フィリピンの文化・社会に根差した言語的独創性を伴う「自らの英語」として主張する正当性や所有権の有無という点に向けられている。それゆえに、フィリピン英語変種の言語的特徴を積極的に評価し、その変種の正当性を通じてフィリピン文化・社会を探るという広い視野を持ち、日本側の「新たな英語観」の育成を視野に入れている。

「新たな動向期」では、「フィリピン流の英語」を認識しつつも、アメリカによる植民地支配の影響により公用語となっている「フィリピンの英語」の積極的評価や、英語を教育言語としてきた高学歴者や適切な訓練を受けた語学教師の英語は「世界標準英語（グローバル・イングリッシュ）」であるとの認識が提示されている。また、「新たな動向期」の眼差しでは、日本の英語教育・学習環境の課題を前提にした「話す力の育成」という教育的目標が意識され、初級者から中級者に適した英語学習機会であるとの評価がされており、日本の英語学習者にとっての「教育モデルとして英語の適切さ」や「英語/英語教師の質」に向けられている。

上記の時期区分ごとに「フィリピンの英語」に対する眼差しに含まれる評価や価値判断は異なり、日本側の事情を踏まえた評価基準・尺度、価値判断（優劣や自己解釈）が時代とともに変化してきた経緯が浮かび上がる。現時点においても、「フィリピンの英語」に対する異なる眼差しが混在する状況のなか、今後どのように英語が日本とフィリピンを結び、両国の制度のなかに固定化・定着化されていくのかという点は、複雑化する国際情勢において「ことば」が生み出す新たな関係性構築の事例としても大変興味深い。

(2) 「新たな動向期」における懸念

費用対効果や自由度の高い英語学習法として定着してきた「オンライン英会話」であるが、その利用方法について憂慮するケースも生じてきている。

オンライン英会話を活用して効果的に英語を学ぶためには、先生への感謝

を忘れないことが大切であり、レッスンを通じて出会う様々な先生と、「いい関係を自分から築いていくようにすべき」（嬉野, 2013, p.205）であるとの心構えが指摘されているが、朝日新聞（2024）は「オンライン英会話講師、相次ぐセクハラ被害」（07月21日朝刊）で、日本人生徒からフィリピン人女性講師に向けられたセクハラ文言や、ネット上でのわいせつ行為について取り上げ、運営会社による対策の必要性を報じている。

また、大坂府堺市では、2024年度に市立中学校でフィリピン人英会話講師によるオンライン授業の実施予定があるなか、予算審査特別委員会において事業に対する質疑が市議より出された。「フィリピン人に英会話を教わるなら、日本人の教師に教わればいいのではないか」や、「かつてアメリカの植民地だったフィリピン人に英語を教わる」ことに対し「これは決して愉快な話ではない」との発言があり、その市議に対して人種差別と受け取られる発言には気をつけるよう嚴重注意があったことが報道されている（読売新聞, 2024）。

「フィリピンの英語」は日本の言語状況下で英語学習を効果的に促進する選択肢の一つとして浸透しつつあるが、同時に異なる思惑・立場から向けられる「フィリピンの英語」への眼差しには、ジェンダーや人種などに対する否定的な評価や価値判断もどこかに潜んでいると考えられる。今後の課題として、英語学習における費用対効果の指標のみならず、文化・社会への眼差しを含む教育的効果（特に公教育においては）の検討も視野に入れるべきであろう。

(3) 広がりつつある「フィリピンの英語」と今後の日比関係

「フィリピンの英語」は私教育における英語留学、オンライン英会話、フィリピン人英語講師のみならず、公教育分野にも広がりを見せており、学校教育制度へ組み込まれつつ段階であるともいえる。公教育における「教材」や「入試制度」で顕在化する「フィリピン」の事例についても、今後の動向を考察するためにここで触れておきたい。

① 教科書のなかの「フィリピンの英語」

「アジアの英語」「世界諸英語」に関連したトピックを扱い、異文化理解促進を目的とする語学教科書や関連資料（主に大学生向け）も数多く出版されている。ここでは「フィリピンの英語」が掲載されている「大学生向け英語教材」と「中学校英語教科書」のを取り上げる。

・大学用英語教科書

2012年に金星堂より出版された大学生向け語学教材の *Understanding English across Cultures*（本名・竹下・D'Angelo, 2012）に“More Non-Native Speakers than Native Speakers”（Unit 5）があり、フィリピン特有の表現を含むコミュニケーションの一場面が題材として扱われている。アジアを例にした、英語の国際化と多様化や英語変種への寛容性を意識させる異文化理解のための教材として「フィリピンの英語」が扱われている。

For example, Philippine English reflects Philippine culture directly. A Japanese businessman asked his Filipino counterpart to pick him up at eight in the morning at his hotel, and his friend said, “I will try.” So the poor Japanese kept waiting, but his friend did not come. He discovered later that, in Philippine English, “I will try” means “I don’t think I can.” These differences may present communication difficulties among people from different English backgrounds at first, but people usually get used to them. (p.27)

・中学校用英語教科書

令和2年検定済みで現在使用されている中学1年生向け英語教科書 *New Horizon 1*（東京書籍, 2020）のなかの“A Speech about My Brother”（Unit 6）には、「フィリピンに英語留学している兄」の紹介文が掲載され、「自分と相手以外の人やものなどについて、たずねたり伝えたりすることができる」との単元目標が設定されている。本文には、フィリピンのセブに英語留学をしている朝美の兄である卓也についての英文が掲載され、彼が「語学学校で英

語を学び、多くのアジア人学生と出会っている」ことや、「平日は学校に行き、週末には時々スキューバダイビングを楽しんでいる」様子が本文に描かれ、南国のリゾート地のイメージ（美しいビーチ）とともにアジア交流ができる英語留学先として紹介されている。この教科書は令和3（2021）年度から令和6（2024）年度の中学1年生用教科書として用いられ、この教科書を使用した中学生たちは「フィリピンは英語留学先の一つ」として認識するであろう。

② 入学試験のスピーキング評価のなかの「フィリピンの英語」

東京都では都立高校入試に英語スピーキングテスト導入を決定し、これまで令和2(2011)年に試験的導入、令和3(2022)年に初回実施、令和4(2023)年に2回目を実施した。4技能のバランスをまった英語能力向上のため、早期英語教育の導入やスピーキングテスト導入方針によるものだが、この入試に点数化されるスピーキングテストの導入検討時より東京都議会・教員・保護者・有識者らの様々な議論を巻き起こし、実施中止を働きかける声も高まっていった（朝日新聞、2021）。

その反対理由には、8万人程度を受験者に対する公平な採点への懐疑的意見があり、「録音された解答は、英語が公用語の一つのフィリピンに送られ、大学学位などを持つ現地スタッフが2人1組で採点する」担当するという民間業者主導による制度設計の不透明性があった（読売新聞、2022）。2024年度以降には、国際文化交流団体のブリティッシュ・カウンシルによりスピーキングテストが実施されることになるが、東京では限定的な対象校のみに導入されたフィリピン人講師との「1対1」での「オンライン英会話」が、2023年度より全都立高校を対象として開始されている（朝日新聞、2023）。

③ 今後の日比関係

鈴木（2016）はフィリピンへの英語留学に着目し、今後の日比関係における新時代を切り開く可能性について言及している。

生徒が学校を通して垣間見るフィリピンは、極めて限定的である。しかし、近年のフィリピンに英語留学する人日本人にも、フィリピン人教師を通して、等身大のフィリピンが映し出される。日本人生徒は、互いに共感し、会話を重ねることで、英語を学ぶと同時に、英語を通してフィリピン社会に生きる人びとの現実を感じ取っている。フィリピン英語留学が一時的な流行に終わらず、量的に拡大すれば、英語教育という新しいビジネスの拡大につながるだけではなく、日本のフィリピンに対する理解は学びの現場から、少しずつだが着実に変化するだろう。韓国資本によって考案された英語留学は、フィリピン、韓国、日本というトランスナショナルな連携の上で展開し、日比関係の新時代を切り開きつつある。(pp.382-383)

日比間の互惠関係を視野に入れた見通しのもとで、英語留学のみならず、オンライン英会話や外国語指導助手 (ALT) にも「将来的には教育現場を中心にフィリピン人を目にする機会が増えることが予想される」(井出, 2017, p.217) との見通しも示されている。

2024年7月時点では、JETプログラムを通じて英語指導を担当するフィリピン人外国指導助手は334名であり(一般財団法人自治体国際化協会, 2024)、在外公館への応募には100名前後の募集に対して7,000名の応募があったという(公益財団法人ニッポンドットコム, 2024)。また、2023年度の政府統計からは、日本民間語学事業や公教育機関で教育に従事するフィリピン人は3,000名程度と推測される(出入国在留管理庁, 2024)。各自治体の教育委員会では独自の取り組みを行い、グローバル教育への対応策としてフィリピン人ALT講師の採用やオンライン英会話導入が進められている。現状において、「教育現場を中心にフィリピン人を目にする機会が増える」という予想が現実となりつつある。

5. 結びにかえて

この研究ノートでは「日比関係における英語」に着目し、時代とともに変

化する眼差しの整理を試みた。「語学ビジネス市場に関する調査 2023」(矢野経済研究所, 2024)によると、その市場規模は2023年度350億円であり、コロナ禍の影響時期(2020~2022年度)の前後のデータと比較しても、この5~6年間で3倍程度までに拡大している。しかし、日本の外国語教室全体市場の全体規模はコロナ禍以降では縮小傾向を続け、(2017年度3,505億円から2023年度2,979億円)にあるなかで、オンライン語学学習市場は急成長を遂げており、多くのフィリピン人英語講師が日本の英語産業を支えている現状がある。

また、コロナ禍期の渡航制限の影響を受けて海外留学者数は激減したが、日本人留学生数調査(一般社団法人海外留学協議会, 2024)によると、2023年の留学生数は64,421人であり、コロナ前の2019年の83%、前年対比218%にまで回復し、フィリピンは268%であった。留学先国別データ(全体比)をみると、「アメリカ(22.4%)」「オーストラリア(19.0%)」「カナダ(14.7%)」「イギリス(10.7%)」「フィリピン(9.0%)」「ニュージーランド(7.6%)」「韓国(3.9%)」の順であった(JAOS正会員の留学事業者40団体の回答)。2033年までに日本人学生の海外留学者数を全体で50万人にまで引き上げる政府目標があるなかで、「安・近・短」の特徴を持つ「フィリピン留学」が、日本の英語学習者にとっての選択肢としてどのような魅力を持つのか、また英語教育分野のなかで今後どのような機能・役割を果たしていくのが気になるところである。

「新たな動向期」の眼差しには、フィリピンの英語産業の存在があり、日本の英語教育改善に向けた観点を含んでいる。「日本側/フィリピン側からみた英語教育市場(需要と供給の仕組み)」についての理解を深めることで、日本の言語(教育)環境のなかに組み込まれつつある「フィリピンの英語」に着目することで、新たな日比関係が浮かびあがるであろう。

「アジアの英語」に対する眼差しには、「日本の英語」や「日本の英語教育」も視野に含まれている。どのように英語を効率的に学習し、グローバル化する社会で「自分のことば」として使いこなすようになるのか。変わりゆ

く日本の言語学習環境のなかで英語学習者が目指すべき「英語（能力）」「英語観」「英語使用」を模索し続けると同時に、「フィリピンの英語」がどのように授業に現れ、教育機関の英語教育のなかに制度化され、政府・自治体の英語教育方針（英語教育のグローバル化・民営化）に組み入れられ、英語教育政策（公教育）に文脈化されていくのかなど、「日本とフィリピンをつなぐ英語」という視点から着目していきたい。

【参考文献】

- 綾部恒雄・永積昭（1983）『もっと知りたいフィリピン』光文堂
- 安藤美冬（2016）『ビジネスパーソンのためのセブ英語留学』東洋経済新報社
- 石井米雄（監）（1992）『フィリピンの事典』同朋舎出版
- 井出穰治（2017）『フィリピン—急成長する若き「大国」』中央公論新社
- 一般財団法人自治体国際化協会（2024）「参加国：JETプログラム参加者数」（<https://jetprogramme.org/ja/countries/>）2024年10月25日閲覧
- 一般社団法人海外留学協議会（JAOS）（2024）「一般社団法人海外留学協議会（JAOS）による日本人留学生数調査2023」（<https://www.jaos.or.jp/newsrelease>）2024年10月25日閲覧
- 嬉野克也（2013）『オンライン英会話の教科書』国際語学社
- 太田英基（2011）『フィリピン「超」格安留学』東京経済新聞社
- 太田裕二（2016）『セブ島英語留学完全ガイド』幻冬舎
- 岡部正義（2017）「なぜ行ったり来たりがうまいのか—フィリピンの『ことば』の難しさを考えてみる」『アジ研ワールド・トレンド』226巻（pp. 34-37）日本貿易振興機構アジア経済研究所経済研究所（<https://ir.ide.go.jp/records/49770>）2024年10月25日閲覧
- 加賀尾秀忍（1953）『モンティンルパに祈る』富士書苑
- 加藤智久（2011）『129円のマンツーマン英会話 スカイブ英語勉強』幻冬舎
- 陰山英男・藤岡頼光（2015）『これからの英語教育—フィリピン発英語学習法』中村堂
- 神谷道夫（2000）「太平洋戦争期フィリピンにおける日本語教育」『小出記念日本語教育研究会論文集8』（pp.7-20）（<https://koidekinen.org/archives/research/2000-kamiya>）2024年10月25日閲覧
- 河原俊昭（2002）「フィリピン [共和国]」本名信行（編）『事典 アジアの最新英

- 語事情』(pp.199-213) 大修館書店
- 木下昭 (2015) 「占領地日本語教育はなぜ「正当化」されたのか—派遣教員が記憶するフィリピン統治—」『東南アジア研究』52 卷 2 号 (pp. 208-234) 京都大学東南アジア地域研究所
- 木下昭 (2022) 「占領下日本語教育はフィリピンでいかに記憶されたか：普通教育をめぐる日米帝国間関係」『日本研究』第 65 集 (pp.301-319) 国際日本文化研究センター
- 公益財団法人ニッポンドットコム (2024) 「コラム：亜州・中国 (24) 遠藤和也・駐フィリピン大使に聞く」『nippon.com』(<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/c05824/>) 2024 年 10 月 25 日閲覧
- 小張順弘 (2021) 「フィリピン英語と日本の英語教育」『アジア英語研究』第 23 卷 (pp.4-28) アジア英語学会
- 佐野直子 (2015) 『社会言語学のまなざし』三元社
- 芝田征二 (1990) 「フィリピンの英語」本名信行 (編) 『アジアの英語』(pp.157-192) くろしお出版
- 篠沢純太 (1989) 『熱帯の闇市』太田出版
- 清水展 (1996) 「フィリピン・イメージ考」『比較社会文化 2』(pp.15-26) 九州大学大学院比較社会文化研究科
- 下川裕治 (1994) 『アジア赤貧旅行 だからアジアは面白い』徳間書店
- 下川裕治 (2007) 『日本を降りる若者たち』講談社
- 出入国在留管理庁 (2024) 「国籍・地域別 在留資格別 新規入国外国人」『出入国管理統計統計表』(https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_nyukan.html) 2024 年 10 月 25 日閲覧
- 鈴木静夫 (1997) 『物語フィリピンの歴史 「盗まれた楽園」と抵抗の 500 年』中央公論新社
- 鈴木孝夫 (2001) 『英語はいらない!?!』PHP 研究所
- 鈴木伸隆 (2016) 「英語留学 親密なマンツーマン教育」大野拓司・鈴木伸隆・日下渉 (編) 『フィリピンを知るための 64 章』(pp.379-383)
- 鈴木有理佳 (2012) 「英語が公用語であることの功罪」『アジア研ワールド・トレンド No.200 (2012. 5)』(p.60) アジア経済研究所
- 高城剛 (2013) 『21 世紀の英会話』マガジンハウス社
- 高城剛 (2014) 『高城剛と考える 21 世紀の 10 の転換期』宝島社
- 田村耕太郎 (2015) 『シンガポール発最新事情から説くアジアシフトのすすめ』PHP 研究所
- 地球の歩き方編集室 (2011) 『地球の歩き方 フィリピン '12~'13』ダイヤモンド・ビッグ社
- 東京書籍 (2020) *New Horizon English Course 1*. 東京書籍株式会社

- 徳川夢声 (1977) 『夢声戦争日記 (二) 昭和十七年 (下)』中央公論社
- 中川剛 (1986) 『不思議のフィリピン 非近代社会の心理と行動』NHK ブックス
- 中川友康 (2015) 『英語はアジアで学ぶ時代がきた! フィリピン留学 [決定版]』宝島社
- 中谷よしふみ (2016) 『英語は「フィリピン」で学べ! 短期集中マンツーマン格安の語学留学』プチ・レトル
- 中屋健式 (1942) 『フィリピン』興亜書房
- 野村進 (1996) 『アジア定住アジア定住 11 カ国 18 人の日本人』めこん
- 花彩美路 (2000) 『誤解されているフィリピン フィリピンとフィリピンの人たちに対する誤解をとくために』日本図書刊行会
- 福屋利信 (2015) 『グローバル・イングリッシュならフィリピンで—セブ・シティから世界をつかめ!』近代文藝社
- 星野達彦 (2013) 『英語はアジアで学ばばうまくいく』秀和システム
- 本名信行 (1990) 「アジアの英語—ノンネイティブスピーカーの正当性をめぐって—」本名信行 (編) 『アジアの英語』(pp.1-22) くろしお出版
- 本名信行 (1999) 『アジアをつなぐ英語—英語の新しい国際的役割について』アルク
- 本名信行 (2003) 『世界の英語を歩く』集英社
- 本名信行 (2006) 『英語はアジアを結ぶ』玉川大学出版部
- 本名信行・竹下裕子・James D'Angelo (2012) *Understanding English across cultures*. 金星堂
- ましこひでのり (2012) 『社会学のまなざし』三元社
- 三木清 (1967) 「比島の言語問題と日本語」『三木清全集 第15巻』(pp.546-558) 岩波書店
- 毛利豪 (2015) 『フィリピン・セブで英語を最短で学ぶ方法』セルバ出版
- 矢野経済研究所 (2024) 「語学ビジネス市場に関する調査を実施 (2024年)」プレスリリース (https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3609) 2024年10月25日閲覧
- 山影進 (1994) 「関係—「地域」を超えて「世界」へ」小林康夫・船曳建夫 (編) 『知の技法』(pp.196-208) 東京大学出版会

【新聞】

- 朝日新聞 (2008) (アジアの外国人社会 :6) フィリピン目指す韓国人 英語留学「安・近」で急増 11月4日朝刊
- 朝日新聞 (2012) 日系企業も開校ブーム 英語学ぶならフィリピン 7月26日朝刊
- 朝日新聞 (2021) 都立高入試の英語スピーキングテスト 教員らが「導入反対」の

- 記者会見 EduA オンライン記事 (<https://www.asahi.com/eduA/article/14511460?msockid=3541a81cc0416f8304aeba76c13b6ec6>) 2024年10月25日閲覧
- 朝日新聞 (2023) オンライン英会話、都立高全191校導入へ 6月28日東京朝刊
- 朝日新聞 (2024) オンライン英会話講師、相次ぐセクハラ被害 7月21日朝刊
- 日本経済新聞 (2010) 英会話、ネットで格安、「仕事で必要」学びに熱 11月6日夕刊
- 日本経済新聞 (2013) 英会話、セブ島から学ぶ、フィリピン人講師、オンラインで指南、大学も単位認定 10月28日朝刊
- 日本経済新聞 (2018) スキルアップ、時間もカネも、会社持ち、人手不足で教育熱再び 3月3日夕刊
- 読売新聞 (2022) 入試「話す英語」注目と不安 11月27日東京朝刊
- 読売新聞 (2024) 水ノ上市議を嚴重注意 堺市議会「ヘイト発言」抗議受け 3月26日大阪朝刊

【雑誌】

『AERA』(2015年3月2日号)朝日新聞社

【映画・テレビ】

- 陸軍省監修. 東洋の凱歌. 比島派遣軍報道部, 1942. (映画)
- ASIAN PASSION ~アジアを駆ける日本人~: 激戦! 英会話ビジネス ~アジアの英語大国 フィリピンは今~. NHK, 2012年9月26日放送 (テレビ番組)
- NHKスペシャル 新・太平洋戦争: 1942 大日本帝国の分岐点 (後編). NHK, 2022年8月14日放送 (テレビ番組)

[亜細亜大学国際関係研究所規程]

(2021年2月22日、教授会決定)

(名称)

第1条 亜細亜大学学則第9条第2項に基づき、亜細亜大学国際関係学部に亜細亜大学国際関係研究所 (Research Institute for International Relations, Asia University) (以下「本研究所」という) を附置する。

(目的)

第2条 本研究所は、国際関係に関連する分野を研究、調査し、学術の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は、第2条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 研究会、講演会等の開催
- (2) 所員の研究活動の助成
- (3) 海外の研究機関、研究者との交流
- (4) 機関誌『国際関係紀要』、その他の発行
- (5) その他、本研究所の目的達成に必要な事業

(構成)

第4条 本研究所は、次のものをもって構成する。

- (1) 所長
- (2) 所員

(所長)

第5条 所長は、本研究所を統括し、これを代表する。

2. 所長は、国際関係学部教授会が教授の中から選出する。
3. 所長の任期は2年とする。ただし、重任を妨げない。
4. 所長が任期中に辞任したときは、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

(所員)

第6条 所員は、国際関係学部の専任教員とし、第2条の目的に添う研究、調査を行い、研究成果を機関誌に発表する。

(所員会議)

第7条 所員会議は、毎年1回開催する。ただし、所長は必要に応じて、臨時に招集することができる。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会を設け、運営に関する事項を審議する。

2. 運営委員会は、所長を議長とし、所員会議で承認された運営委員若干名で構成する。

3. 運営委員の任期は、2年とする。ただし、重任を妨げない。

(編集委員会)

第9条 第3条第4号の事業（機関誌、その他の発行）を行うための編集委員会を置く。

(会計)

第10条 本研究所の運営は、大学からの補助金、寄付金、およびその他の収入による。

(事業報告)

第11条 本研究所の事業年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日までとし、事業報告を所員会議に提出するものとする。

(規程の改正)

第12条 本研究所規程の改正は、所員会議において出席者の過半数の同意を得て決定するものとする。

(付則)

本規程は、2021年4月1日から施行する。

『国際関係紀要』投稿規程

(2024年7月4日国際関係研究所所員会議改訂)

1. 投稿資格

- (1) 本紀要への投稿者は、亜細亜大学国際関係研究所の所員であること。
- (2) 共著論文を投稿する場合には、前項に定める所員が第一著者であること。

2. 紀要論文の掲載要件

- (1) 本紀要に掲載する論文は、国際関係分野の研究もしくは教育に関するものであること。
- (2) 投稿論文に対して匿名審査員による審査を行い、掲載の可否を決定する。

3. 原稿の形式

- (1) 原稿は横書きとする。
- (2) 原稿はワード（40字×40行、英文はダブルスペースで80字×25行）で作成し、ワードファイル及びPDFファイルをEメールに添付して提出する。場合によっては編集委員会が印刷した原稿の提出を求めることがある。
- (3) 注は、通し番号による一括後注方式かハーヴァード方式とする。

4. 原稿枚数等

- (1) 原稿の枚数は、以下の通りとする。
 - ①論文
 - (a) 日本語原稿は、20,000～32,000字程度（図表等を含む。以下同じ）。
 - (b) 英文原稿は、5,000ワード程度～13,000ワード程度。
 - ②研究ノート
 - (a) 日本語原稿は、16,000字程度。
 - (b) 英文原稿は、4,000ワード程度。
 - ③書評（書評論文と書評を統合）
 - (a) 日本語原稿は、8,000～12,000字程度。
 - (b) 英文原稿は、2,000ワード程度～4,800ワード程度。
 - (c) 対象となる書籍は、特に歴史のかつ文献学的意味を持たない限り、原則として執筆時に発行年より5年を経過していないものとする。

④研究動向（資料と通信）

- (a) 日本語原稿は、2,000～4,000 字程度。
- (b) 英文原稿は、1,000 ワード程度。
- (c) 近年の研究動向を紹介する。

⑤国際関係分野の教育

- (a) 日本語原稿は、2,000～12,000 字程度。
- (b) 英文原稿は、1,000 ワード程度。
- (c) 国際関係分野の教育実践例などを紹介する。

⑥その他、編集委員会が投稿を可とした原稿

- (a) 日本語原稿・英語原稿ともにとくに文字数は定めない。
- (b) 投稿予定者は、事前に編集委員会に相談の上、投稿の許可を得る必要がある。

- (2) 日本語原稿には、英文要旨を添付して提出する。英文要旨の長さは、論文、研究ノート、書評、研究動向、国際関係分野の教育、その他の原稿のいずれについても、500 ワード以内（厳守）とする。ただし、論文以外については、英文要旨を省略してもよい。

5. 著作権

- (1) 本紀要に掲載された論文等の著作権は、著作者本人に帰属する。
- (2) 第1項に関わらず、国際関係研究所は本紀要に掲載された論文等を電子化し、それを公表する権利を有し、著作者はこれを許諾するものとする。

6. 別刷り

採用された原稿には、別刷り 50 部を無料で進呈する。

7. その他

その他の場合は、必要に応じて編集委員会が指示する。

前号(第34巻 第1号)目次

論文

- J-クレジット制度のバリ協定目標達成に向けた日本の貢献可能性
——森林分野に着目して…………… 福嶋 崇
- イスラーム基礎教育機関に見るダッワの動態
——タイ南部の事例から…………… 小河 久志
- Examining the Application of Universal Design for Learning in Higher Education EFL
and ESL Contexts: Enhancing Accessibility in the Classroom
…………… BROOKS Mikio

2024（令和6）年度国際関係研究所研究会

今年度は以下の通り2回の研究会を開催した。

1. 第1回研究会

開催日：2024（令和6）年7月4日

講演者及び講演タイトル：

- (1) 川中豪教授 “Status Quo or Pluralism? Dominant Party Rule and People’s Preferences in Singapore”
- (2) 伊藤公二教授 “Effects of Trade Sanctions in Global Value Chain: Analysis Using International Input-Output Tables”

2. 第2回研究会

開催日：2025（令和7）年1月23日

講演者及び講演タイトル：

- (1) 春日尚雄特任教授 「ASEANのエネルギー見通しとベトナムにおける電力事情—2024年8-9月の現地調査から—」
- (2) 妻木伸之特任准教授 「教養としての国際法—専門家以外の者が国際法を学ぶ意義はどこにあるか?」

〔編集後記〕

『国際関係紀要』第34巻第2号をお届けします。本号には研究ノート1本を掲載することができました。ご寄稿いただいた方、編集委員会の皆さま、また査読でお力添えいただいた方に深謝申し上げます。これからも皆さまのご投稿をお待ちしております。

(編集担当 金賢貞)

【紀要編集委員】（○印…委員長）

○角田 宇子 増原 綾子 綾野 誠紀 大野 亮司
金 賢貞 小竹 直子

【執筆者紹介】（執筆順）

准 教 授 小張 順弘（応用言語学・社会言語学）

国際関係紀要 第34巻 第2号

2025年3月20日発行

編集者 亜細亜大学国際関係研究所
発行者

〒180-8629

東京都武蔵野市境 5-8

電話 0422 (36) 7379～80

制 作 松籟社

〒612-0801

京都府京都市伏見区深草正覚町 1-34

電話 075 (531) 2878

**JOURNAL OF
INTERNATIONAL RELATIONS**
ASIA UNIVERSITY

VOL.34

March 2025

No.2

RESEARCH NOTE

Glances at English in Japan-Philippines Relations:

Views on “English in the Philippines” from the Japanese side

..... Yoshihiro KOBARI (1)

**RESEARCH INSTITUTE FOR
INTERNATIONAL RELATIONS**
ASIA UNIVERSITY
TOKYO, JAPAN